

捨てたはずの言葉が、
呼吸として残っている。

言葉は、消えたように見える。
けれど沈黙の底では、
まだ形を持ったまま留まっている。

それは、思い出されることはない。
ただ、消えきらないまま在り続ける。

それは、後悔ではない。
言えなかったという感情でもない。

未練でも、迷いでもなく、
「本当は言うべきだった」という反省でもない。

沈められた時点で、
それはすでに感情の領域を離れている。

人は、言葉を捨てるとき、
それを消しているわけではない。

強すぎた一文。
場を揺らしてしまう可能性のあった語尾。
その瞬間には選ばれなかった響き。

それらは、発声の手前で止まり、
沈黙の層へ落ちていく。

沈んだ言葉は、
思考の中には戻らない。

ただ、
息の深さをわずかに変え、
間の長さをずらし、
呼吸のリズムとして残る。

何も言わなかった場面ほど、
空気は静かに偏る。

発声されなかった言葉は、
消えるのではなく、形を変える。

意味としてではなく、
流れとして残る。

その人の呼吸の中に、
わずかな重さや、揺れとして滲む。

だから、
整った呼吸の奥には、
すでに選ばれなかった言葉が沈んでいる。

言葉は、
消えたのではなく、
呼吸に溶けている。

Edition — 静謐の呼吸
別景：沈めた言葉

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026